

資 料

パ リ
—— 誕生から現代まで ——
[XV]

P.クールティヨン 著
金 柿 宏 典* 訳注

ルイ 16 世とフランス大革命 (2)

1790 年 7 月 14 日、国民議會¹⁾ はパリに赴く。連盟祭²⁾ が、シャン・ド・マルスで熱狂的な興奮の中で挙行された。タレイラン³⁾ が祖国の祭壇で式を司会した。ラ・ファイエットが、国家と法と国王への忠誠を宣誓する。今度は、ルイ 16 世が宣誓する。そこにいたすべての人は整然と秩序を保っていた。パリの 48 区において支部、クラブ、「友愛会」sociétés fraternelles が結成されたが、それらは修道士たちを追放した修道院に本部を置いたのである。弁護士のだントン⁴⁾ やジャーナリストのカミーユ・デムーラン⁵⁾、エペール⁶⁾ やマラー⁷⁾ の傍で、芸術家、労働者、あらゆる階級の市民たちが、その日は、自由への共通の愛の中に永遠に結び合わされたように見えたのである。

シャン・ド・マルスの連盟祭から 1 年たたないうちに、国王のヴァレンヌへの逃亡⁸⁾ が、パリに強烈な動揺を惹起した。人民を理解する振りをしながら、外国勢力の支援を求めようとした国王に、人々は不信感を抱いたのである。シャン・ド・マルスに集合した大群衆が、ルイ 16 世の告発と廃位を要求する請願書に署名する。デモは喧騒を極めた。死者が出る。国民衛兵の先頭に立ち、市当局は人心を鎮静しようとした。だが投石される。バイイとラ・ファイエットは戒厳令を発し、パリ市民たちに発砲したのである。

* 福岡大学人文学部名誉教授

1792年4月20日、フランス大革命に対抗して同盟した諸外国の君主たちに対し、宣戦布告が発せられた。かくて人々は槍で武装し、部隊を結成し、目印しとして赤い縁なしのボネット帽をかぶった。これはローマ人たちが既に知っていた自由の古い象徴である。「帽子といえば... 私はまちがっていた。赤いボネット帽は脱がれた、とメルシエ⁹⁾は『パリ情景』*Tableau de Paris*の中で言っている。血、死、復讐という虐殺の言葉、ジャコバン派の慣用語のABCが叫ばれ、隣から隣へとわめかれたのである。「革命の完成」の旗は、「ギロチンの鬼女たち」と呼ばれる女性たちによって奉持された。ギロチンは4月25日から使用されていた。サン・キュロット¹⁰⁾たちは街頭で『サ・イラ』*le Ça ira*¹¹⁾を歌っていた。6月20日、怒り狂った民衆はチュイルリ宮に乱入し、宮殿に来て国王を見て茫然として足を止めた。国王は赤いボネット帽をかぶせられ、一人の「愛国者」からワインをすすめられるままに受けたからである。

8月10日、警鐘が鳴り渡る。非常呼集がかけられたのだ。同時に軍鼓の音や大砲の砲撃の音が響いた。チュイルリ宮殿が人民によって包囲され、スイス人親衛部隊¹²⁾の勇敢な抵抗の後、強襲により侵入されたのである。国王は、バルコニーに姿を見せ、味方の人たちから熱烈に拍手された。しかし彼がバルコニーから下りてカルーゼル広場¹³⁾の方に数歩行きかけた時、「国王くたばれ！ 国家萬歳！」という声を聞いたのである。その声は到る所から聞こえてきた。次に「廢位だ！ 廢位だ！」

ルイ16世は最後に議会に避難する事を承知する¹⁴⁾。彼はまだ自分の支持者たちを思いながら、宮殿を去る。「暴君を打倒せよ！ 殺せ！」と民衆は怒号している。彼は議会に到着し、そこで東の間の保護を見出す。しかしパリ中到着所に、次のようなビラが貼られた。「国王は拘留され、その家族と彼も人質となった。議会は廢位のための審理を開始するだろう。」

ルイ・カペ¹⁵⁾はタンプル塔¹⁶⁾に幽閉されるが、それはコミュニヌ・ド・パリが強硬に主張し、国王一家が連行されたからである。国王は塔の3階に入れられた。最初の部屋が控え室であった。彼の忠僕クレリ¹⁷⁾は、ここから三つの別々のドアがそれぞれの部屋に通じていた、と証言している。入口のドアの正面に国王の部屋があり、その部屋に皇太子の寝台が置かれていたが、この少年からカルマニョルを歌うことを王家の人たちは学ぶことになる。4つの部屋は布が仮天井になっており、仕切り壁には壁紙が貼ってあった（控え室の壁紙は刑務所の内部を示していた）。羽目板の上に、三色に塗られた枠に入った『人權宣言』¹⁸⁾が懸けてあった。洋服筆筒、机、椅子4つ、ソファ、食卓、寝台。王妃は、

4階で、王女のマダム・ロワイヤル、エリザベス夫人と一緒にだったが、意地悪いティゾンの監視をうけていた。

理性という女神がすべてを手に入れた。人々はロバやラバに聖職者の帯状の祭服のストラヤや上祭服のカズラを着せて、教会の祭壇で飲み食いをした。聖体器でアンチョビのサラダを作って食べた。ノートル-ダム寺院ではユダの諸王の像の首が切り落とされたが、それはフランス国王たちの身代わりにされたからである。通りの名が変えられ、saint という語が禁止された（そのため、オノレ街、ロック街、アントワーヌ街というようになる）。新生児は宗教色のない名、「8月10日」Dix-Août¹⁹⁾、「実月」Fructidor²⁰⁾をつけられた。あるサン・キュロットは自分の息子に「マラ-クートン-ピック²¹⁾と名づけた。赤いポネット帽と正三角で飾られた派手なポスターが、首都の壁を覆った。パリは槍と叉銃で飾られた。女性たちは色美しいリボンをつけた「自由」の帽子を被り、帽章をつけた。革命軍の分隊は通りを練り歩いた。大通りには、毎日、アントワーヌ門²²⁾から人の群が続いた。自由の木、活人画、凱旋式の車があった。到る所に三色があった。遂には手袋や靴下止めにまでみられるようになる。バスチーユの石で置物が製造される。有名な石の断面に、ジャンリス夫人²³⁾は、7月14日の太陽の下で、きらびやかに「自由」の文字を刻ませる。彼女はオルレアン公フィリップ・エガリテ²⁴⁾の愛人であったのではないか？

彼の宮殿にパリ市のレリーフが展示してある。これは写実的な大画面で、パリ市民はそこに司祭から取り上げた自分の教区の鐘楼を見分けることができた。理性のヴァチカンは、プロンシャ生れのコスモポリタンの一人の夢想家アナカルシス・クローツ²⁵⁾がその使徒である。彼は素晴しき都市パリを宇宙共和国の中心、宇宙の首都にしようと欲した。「ここでは大理石と象牙、黄金と香、あらゆる風土の芸術と光明が、幸福で自由な人々の手によってトロフィーとしてもたらされる」。

9月2日、フランスの亡命貴族たちが加わった敵軍が国境を侵犯したという事を人々は知った。かくして武装した革命派のグループが収容されていた政治犯たちを虐殺せんとし、パリ市内の刑務所に乱入したのである。バスチーユ監獄でサド侯爵²⁶⁾が『ジュスチーヌ』²⁷⁾の初稿を書いていた頃から、異常な興奮が醸成され、不穏な空気が広がっていた。ある人々の中では、流血の趣好が神を冒瀆する快樂に混じりあい、またある人々の間では、その趣好が猛獣の野生に戻ったのである。司祭や修道士や尼さんたちが虐殺されたが、特にカルメル会修道院²⁸⁾ではひどかった。「9月虐殺の参加者」のなかの女性たちは、この修道会の特別席に殺到した。

この9月を通じ、パリは31大隊約15,000名の戦闘員を国境へ派遣した。「共和暦2年の義勇兵」となるこれらパリ市民たちは、あらゆる困苦欠乏に耐え、ラ・マルセイエーズを高唱し、栄光とヒロイズムに覆われる。

パ　　リ

— 誕生から現代まで —

(訳　注　XV)

1) Assemblée nationale constituante : 立憲国民議会。1789年5月5日、ヴェルサイユで開催された三部会は、貴族部会 270 名、僧職部会 291 名、第三部会 584 名の議員で開催される予定だった。しかし貴族部会、僧職部会の議員は第三部会の議員と同居する事を拒否、議事は紛糾したまま進展しなかった。第三部会は自らを「国民議会」と称し(6.17.)、国王の解散命令を拒否し、議場を閉め出されたので、掌球場を臨時の会場とし、憲法制定まで戦う決意を宣言し、「立憲国民議会」と改称したのである(6.20.)。国王の命令により、貴族、僧侶部会の議員もこの第三部会の「立憲国民議会」に合流し、この名称が正式のものとして公認された(7.9.)。従ってこれ以後は立憲議会の呼称が正しい。立憲議会は「人権宣言」の起草を始め、貴族や僧侶の封建的特権の廃止、信仰や出版の自由、教会財産の没収、国王の特赦権の廃止、拷問の廃止、ギロチンの採用、同業組合の廃止、フランス全土を 83 の県に分割することなど、近代的な改革を行い、1791 年の憲法を準備した。

2) Fête de la Fédération : バスチューユ占領一周年を記念して、パリのシャン・ド・マルスで開催された。全国 83 県の代表 60,000 人が集合し、ルイ 16 世も出席し、憲法を遵守することを誓約した。タレイラン司教が、三色の綬をまとった 300 名の司祭を従え、祖国の祭壇でミサを行った。広場の周囲に設置されたスタンドには 30 万以上のパリ市民が詰めかけ、この式典に参加した。入口には 25 米に達する凱旋門が建立され、中央の祖国の祭壇は円形、方形、円形の三層の土台からなり、最上部には香炉台が据えられていた。国王夫妻は士官学校の中央バルコニーの前の貴賓席に座っていたが、国民議会議長バイイの宣誓の後、国王が祭壇に向かって両手をあげ、同じように宣誓した時、出席者一同は歓呼の声をあげて喜び、王政打倒などは夢にも考えていなかったのである。翌年の連盟祭は、この第一回の熱気は全くなかった。

3) Charles Maurice de Talleyrand-Périgord, prince de Benevento (1754–1838) : フランスの政治家。ペリゴール地方の名家の出で、父は上級軍人だったが、彼は幼年時の事故で跛となり、軍歴を諦め聖職者の道を選んだ。サン・シュルピス神学校で勉学に励み、家柄と教養のお蔭で順調に出世し、1789 年にはオータン司教になった。下級の貧しい司

祭たちのために努力していた彼は、1789年の三部会の僧侶部会の代表となり、改革派に投じ、ミラボーと親交を結び、憲法制定のために尽力し、また教会財産の国有化を提言した。1790年7月14日、第一回連盟祭のミサを行い、名声をたかめた。

彼は聖職者市民法を受容し、宣誓司祭たちのリーダーになったため、基本法に反対を表明していたローマ教皇から破門された。そのため1791年1月から、オータン司教職を諦め還俗してしまう。彼は外交使節としてイギリスに派遣され(1792.2.3.)、フランスがオランダを攻撃しない限り、イギリスはフランスに宣戦しない確信を持って帰国した。その後、駐英大使の副官として再びロンドンに赴き、祖国の政情の急展開をみて亡命を決意、イギリス、次にアメリカで暮し(1794-96)、恐怖政治が終熄して安全が確認されてから帰国した(1796.9.)。翌年7月、外相に就任するが、総裁政府の短命を見抜き、99年7月に外相を辞任し、新しい権力者ナポレオンと結んで、霜月18日のクー・デタの後に再び外相に就任した。

彼の外交政策の基本は、永続的な平和をフランスにもたらすことであり、この目的のために全力を尽したが、この目的のためには主君を裏切ることをためらわなかった。彼の保身の利己的目的もあったけれども。従って彼はリュネヴィル条約(1801.2.9.)やアミアン和約(1802.3.27.)で実現した平和を維持するためナポレオンの侵略戦争には反対で、皇帝が彼抜きでロシア皇帝とティルジット条約(1807.7.1.)を結んだ時、外相を辞任した。皇帝のスペイン及びロシア遠征に反対、ナポレオンの没落を見越して、ブルボン王朝と接触し、王政復古となるや、ルイ18世の外相としてウィーン会議に出席し、戦勝国のイギリス、オーストリア、ロシア、普ルシャの間を巧妙に離間し、正統王朝主義を主張して会議をリードし、フランスの国益を守った。このウィーン会議が彼の外交官としての最大の晴れ舞台といえよう。1815年7月9日首相となるが保守派の貴族たちの圧力により辞職(9.23.)、以後は7月革命まで、自由派の貴族のリーダーとしてシャルル10世の野党となった。ルイ・フィリップは彼を駐英大使に任命、彼はベルギー問題で奮闘するが、パーマストン(1784-1865)に破れ、ベルギーの独立と永世中立を認めざるを得なかった。しかし、四国同盟締結には成功し(1834.8.28.)、フランス、イギリス、スペイン、ポルトガルの4か国は、イベリア半島における自由主義的政府を支持するため、保守派と対決することを宣言する。1834年秋、大使を辞任、カトリック教会と和解していたため、終油の秘蹟をうけることができ、1838年5月17日に歿した。現実的政策に固執する余り、策略を弄しつつ保身もはかったため、節操なき破廉恥漢との酷評もある。

4) Georges Jacques Danton (1759-1794) : フランス大革命初期の政治家。堂々たる体躯、魁偉な容貌、破れ鐘のような大声、尽きることのない精力、広範な知識と教養、巧妙なる辯舌で、一時期、大革命の進行を左右した。パリで弁護士となり (1785)、高等法院附となって弁護活動にあたるうち、旧制度の矛盾を実感、革命運動に参加、バスチーユ襲撃に加わり、コルドリエ・クラブ創立に参加し (1790.6.) 民衆運動を指導した。翌年セーヌ県庁の一員としてパリ市の第二助役に選出され、1792年8月10日のチュイルリ宮襲撃を準備し、国王廃位の動きを加速させた。ジャン・ド・マルス事件の陰の主謀者とされた彼は、逮捕を免れるためイギリスに亡命していたが、容疑は決定的なものではなく、数か月で帰国している。

その後ジロンド派の内閣の法相、ついで国民公会議員として、ロベスピエール、マラーと共に革命的人民大衆を指導する。ルイ 16 世処刑に賛成票を投じ、ジャコバン派の議長となり (1793)、この間に公安委員会の委員としてジロンド派の追放、反革命分子の逮捕、革命戦争の遂行に努力した。特に諸外国の干渉を拒否し武力を持って大革命の理念を守護するため、国民に「剛胆」を求める議会での雄弁は有名である。

しかしジロンド派の没落と戦況好転の間に、ジャコバン党右派の新興ブルジョワジー層の立場に移行、恐怖政治の緩和と革命戦争の早期終結を主張したため、内外共に大革命の理想の実現に固執していたロベスピエールらの左派と対立、過激派のエベール派の粛正の後、党内抗争に破れ、王党派との密謀との口実でロベスピエール派によって逮捕され、デムーランらと共に処刑された (1794.4.5.)。彼は精力的で柔軟な政治感覚を持っていたが、長期展望の視点がなく、また生来の享樂的性格が災いして、私生活が乱れ、金に困って、収賄や公金を浪費した、と攻撃された。革命政治家の資質を十分に生かすことができなかった。処刑台上でダントンは、死刑執行人サンソンに命じる。「僕の首を人民に見せるのを忘れないでくれ。見せるだけの価値はあるから」。斬り落した首をサンソンが周りにつめかけた見物人たちに高々と掲げて見せると、上げ潮のようなどよめきが群衆の中から湧き上がった、と伝えられる。

5) Lucile Simplicite Camille Benoit Desmoulin (1760-1794) : 北仏エーヌ県ギーズ市 (ヴェルヴァン郡の郡庁所在地で、人口は約 6,000 名) の生れで、父はこの市の裁判所の判事であった。パリで弁護士をしている時に、革命の到来と必要性を予言する有名な煽動演説を、1789年7月11日、パレ・ロワイヤル広場で行い、注目をあびた。同志の印として、広場の木の葉をつけようと呼びかけた事も有名な挿話である。青春の情熱に燃える

熱血漢の彼は、1792年に国民公会議員に選出されるが(1792)、昔の同僚だったロベスピエールよりもダントンと意気投合、以後行動を共にした。彼はそれまでに『自由フランス』*La France libre* (1789)、『パリ市民へ寄する街燈演説』*Le Discours de la lanterne aux Parisiens* (1789)などのパンフレットを出版し、王政を批判、革命の必要性を強調していたので、「街燈検事」*Procureur de la lanterne*の異名を付けられていた。彼は更に『フランス及びブラバンの革命』紙*Révolutions de France et de Brabant* (1789-91)を創刊、やがて『コルドリエおやじ』紙*Le Vieux Cordelier* (1793)も発行し、革命的ジャーナリズムを完成させる。また『ブリソー派の歴史』*Histoire des Brissotins*を公刊し、ジロンド派を攻撃し、その没落に一役買った。しかしながらこの頃から恐怖政治の行き過ぎに疑問を感じ、革命の健全化を狙う論陣を『コルドリエおやじ』紙上で張ったが、時既に遅く、反革命分子としてダントンと共に逮捕され、共に処刑されてしまう(1794.4.5.)。夫の処刑に反対した妻リュシル・デュプレシス(1771-1794)も、夫の処刑後の8日後に処刑されたが、僅か23歳で、結婚4年目の薄倖な人生であった。

6) Jacques René Hébert (1757-1794)：通称「デュシェーヌおやじ」*Père Duchesne*。フランスのジャーナリスト、政治家。大革命までは劇場の切符切りなどの貧しい生活をしていた。教育はほとんど受けなかったが、大衆の動向を敏感に嗅ぎつけるジャーナリストの資質に恵まれ、革命の大衆紙『デュシェーヌおやじ』紙を創刊した(1790)。その過激でざくばらんな誰にでも判り易い文章は評判を呼び、パリの一般庶民の愛読紙となった。コルドリエ・クラブの会員となった彼は、8月10日事件で指導的役割を果し、パリ市の検察官代理に任命され(1792.12.)、ジロンド派の追放、革命戦争の徹底抗戦、穀物などの最高価格の設定、国王夫妻の処刑など主張、特に民衆の憎悪的になっていた王妃マリ・アントワネット、この「オーストリーの雌狼」をギロチンにかけよ、という訴えは、読者の大喝采を博した。かくして彼は急進的小市民や無産者階層の支持を集めエベール派 *Hebertistes* を形成(1793)、革命派の中で強力な過激集団となった。彼は国民公会もあまりに穏健すぎて革命推進に熱意がないとして、その権限すべてをパリ市に奪取しようとした。ジャコバン派の独裁体制の確立と恐怖政治の推進までは、エベール派の力を利用して協力してきたロベスピエールは、此処に至って余りの過激な暴走の危険を感じ、エベール派の弾圧に乗り出した。エベールは自分を支持してくれるパリの各地区に蜂起を呼びかけたが、ロベスピエールの迅速な対応により各地区の勢力は分断鎮圧され、蜂起は失敗。エベールとその同志は反革命の罪により死刑の判決をうけ、1794年3月24日午後4

時過ぎ頃に処刑された。彼の妻も4月13日にデムーランの妻リュシルと共に処刑されたが、リュシルが愛した夫との再会を信じて、唇に微笑さえ浮べて処刑されたのに対し、エベールの妻ジャクリーヌは恐怖のあまり半死半生の状態で立って歩けず、処刑台に曳きずり上げられる醜態を演じたという。

7) Jean Paul Marat (1743-1793) : スイス西部ヌーシャテル郡のヌーシャテル湖の西岸のほぼ中央にあるブードリの出身。父は医師で、彼も家業を継ぐため、ボルドーやパリで医学を学び、1767年にはロンドンに定住し、名医の評判を得た。その間、彼は、人間論や政治に関する著書を発表した(『人間に関する哲学的試論』 *Philosophical Essay on Man* : 1773 など)。1775年、エディンバラでの講義でセント・アンドリューズ大学より博士号を授与された。彼の名声はフランスにも届き、アルトワ伯(後のシャルル10世)の親衛隊軍医として招かれて帰国した(1777.6.)。この頃、彼はフリー・メイソンに入会している。また彼の視覚と電気の研究は、フランクリンやゲーテから注目されたが、彼がニュートンを批判したため、科学アカデミー会員にはなれなかった。

大革命の到来を予感していた彼は、三部会召集以前から政治的パンフレットを執筆、大革命が勃発するや『人民の友』紙 *L'Ami du Peuple* (1789-92) を創刊、革命の進行を妨害しようとする人々を告発し、革命を正しい方向に発展させるよう、大衆に訴えた。彼の過激な主張は当局の忌諱に触れ、逮捕命令が出されたため、ロンドン亡命を繰り返した(1790.1.-5., 1791.12.-1792.5.)。このように立憲議会におけるミラボーやラ・ファイエットらのファイヤン派、立法議会を支配していたブルジョワ階級のジロンド派に挑戦し、『人民の友』の発行停止、2度の亡命は、彼の人気をますます増大させた。この弾圧は、彼の本質的な闘争的性格をより強固に鍛え上げた。帰国後、彼はコルドリエ・クラブをバックに、8月10日事件の主謀者として国王廃位への道を開き、反革命派を一掃するため、革命の敵、人民の裏切り者を許さずとパリ市民を煽動し、市内各地の刑務所に収容されていた囚人たちを虐殺した1792年9月2日から4日にかけての9月虐殺事件を演出した。この虐殺事件は恐怖政治の開幕となった。同年9月21日に共和制が宣言されると、彼は『人民の友』を『フランス共和国新聞』 *Journal de la République française* と改称する(9.25.)。国民公会議員に選出されるや、ルイ16世の裁判を主張、遂に処刑を実現した。しかし彼の過激さをジロンド派に攻撃され、一旦は逮捕されるが、パリ市民の絶大な支持と声援により、無罪釈放となった(1793.4.24.)。彼は仇敵ジロンド派の一掃を計画し、93年5月31日から6月2日にかけて一斉蜂起を実現させ、ジロンド派を議会から駆逐し、

処刑台に送ることに成功した。しかしジロンド派に共鳴していたマリ・アンヌ・シャルロット・コルディ・ダルモン（1768—1793）によって、温浴中に刺殺された（1793.7.13.）。彼女はその後で逮捕され、4日後の7月17日に処刑された。

マラーは革命の殉教者として壮麗な葬儀が挙行され、彼の最後を描いた画家ダヴィド（1748—1825）の提案により、遺体はパンテオンに安置されたが（1794）、テルミドールの反動政府によって取り除かれてしまった（1795.1.）。彼の死は、反革命派に対するより厳しい態度を政権を握ったばかりのモンターニュ派にとらしめ、恐怖政治を加速させる。そして裏切りをささやかれているダントンの声望が揺らいできたため、革命三巨頭の中で一人残ったロバスピエールの独裁者の道が開かれたのであった。

8）ヴァレンヌへの逃亡：ヴァレンヌとは正確には Varenne-en-Argonne といい、フランス北部ムーズ県の県都ヴェルダン市北西のエール川に臨む所である。1791年6月21日、前夜パリのチュイルリ宮を脱出、メッツで王党派軍と合流しようとした国王ルイ16世と王妃マリ・アントワネット、皇太子、皇女らの一行が共和派に逮捕された場所で、史上、ヴァレンヌの逃亡事件として有名である。

国民公会に支配されたパリで、危険を感じた国王は、地方の都市に脱出して王党派軍を招集し、武力で王権を再び確立しようとした。彼は自分に忠誠を示していたブイエ将軍とその部隊が駐屯している軍部メッツ（北仏モーゼル県の県都で、王妃の母国オーストリアは目前であった）をえらんだ。

王妃を熱愛していたスウェーデン貴族でフランス軍大佐であったハンス・アレックス・フェルセン伯爵（1755—1810）の尽力で、国王一家4名と貴婦人2名の6名は庶民の服装に変装し、偽のパスポートを携帯、大型馬車ベルリーヌで、6月20日の深夜チュイルリ宮を脱出した。伯爵自身も御者に変装し途中のボンディまで同行した。途中、何度か国王は人々からその正体を見破られるが、好意の目差しで見られただけだった。しかし、サント・ヌメールまで来た時、その地の郵便局長の息子で熱烈な共和派の青年がこの一行を不審に思い、大型馬車に先行し、ヴァレンヌの自警団に、この馬車の審問をするように注進した。エール川の橋のバリケードで停車した馬車は、武装した自警団に取り囲れ、国王一家は拘留されるが、乗客たちの正体が看破されるのに時間はかからなかった。パリに護送された国王は、自国民を裏切って見棄て、敵国に逃亡し祖国に叛逆を企てた人物として、パリ市民の憤激的になった。この脱走事件は、王政に対する国民の敬愛と信頼を失わせる契機となったのである。王政廃止まではあと一歩となった。馬車が大き過ぎて人目につき、

約束の時間に迎える王党派軍に会えなかったり、地理不案内のため道に迷ったり、と不幸な偶然が重なったのも、ルイ 16 世にとっては不可避の宿命だったのかもしれない。

9) Louis-Sébastien Mercier (1752 - 1818) : 劇作家、小説家。パリの商人の子らしく疲れを知らぬ彼は、政界、学界、文壇で活躍、多くの著書を公刊し、グリムからは「疲れを知らぬ三文文士」と嘲笑されたほどである。1781 年に最初の 2 巻を出版した『パリ情景』*Tableau de Paris* で当局から不穏分子とマークされたため、ほとぼりの冷めるまでスイスに住んだ。この作品はこの後も書き続けられ、全 12 巻 (1781-88) の大作となる。この中でメルシエは、大革命勃発直前のパリの風俗を細密に描写し、18 世紀の世紀末の一般庶民の生活、考え方などの精神状態を鮮やかに摘出し、ルポルタージュ文学の先駆的作品に仕上げている。劇作家としては、ディドロの提唱した町人劇理論に共鳴し、ラシーヌやボワローの古典主義を否定、現実の民衆の生活を描くべしと主張した。イタリア座で『ジャンヌヴァル』*Jeanneval* (1769) などの作品を上演、それなりの成功をおさめたが、今日では忘れ去られている。

政治家としては、亡命先のスイスから大革命勃発後に帰国、セーヌ・エ・オワーズ県選出の代議士として国民公会に登場、ジロンド派に属した。そのため恐怖政治時代には反革命分子として逮捕され、ラ・フォルス刑務所に投獄される (1793.10.-1794.12.)。幸い処刑は免れ、五百人会議 (1797.3.-1799.6.) や法制審議院 (1799.12.-1807.) の議員に返り咲いた。また新設のエコル・サントラル (現在のエコル・ポルテクニクの前身) で歴史学を担当、学士院会員にも選ばれた (1795)。彼はまた『2440 年、別題、こよなき夢』*L'An 2440 ou Rêve s'il en fut jamais* (1770) という空想未来小説を書いているが、これは当時の庶民たちの願望が実現する楽園フランスの姿を語った夢物語である。

10) Sans-culottes : culotte は「半ズボン」のことで、貴族や富裕なブルジョワたちは、この下に長靴下をはいていた。従ってキュロットは旧制度下では支配階級もしくは紳士の服装で、その象徴とみなされた。一方、労働者や庶民は縞模様のパンタロン「長ズボン」をはいているのが普通だったので、キュロットをはかない連中の意味の「サン・キュロット」は、大革命初期には、一般庶民、つまりは革命派の大衆を侮辱する言葉だった。しかし革命の進行と共に、人々は誇りを持ってこの言葉を自分たちを示す表現として使用するようになった。過激派のモンタニャール派は、共和暦の年末の 5 日間 (閏年は 6 日間) を「サン・キュロットの祝日」*Sans-culottide* として祝ったのである。

11) *Ça ira* : 大革命時代に、大衆によって愛唱された流行歌で、名前は歌詞のリフレ

インに由来する。

Ah! ça ira, ça ira, ça ira,
les Aristocrates à la lanterne!
さあ、用意はいいか、やっちまえ!
貴族共を街灯に吊し縛り首にしろ!

歌詞はストリート・ミュージシャンのラドレ、作曲はドラマーのベクールといわれるが、1797年に総裁政府により禁止された。

12) les Gardes suisses : スイス人の親衛隊の歴史は古く、「スイス百人隊」Cent-Suisses の名でフランス国王のボディール・ガードとして、ルイ 11 世 (1423-1483) の 1496 年に、精鋭の歩兵部隊として誕生した。時代が下って、この百人隊では手薄になったため、1573 年、シャルル 9 世 (1550-1574) により募集され、ルイ 13 世 (1601-1643) の 1616 年に連隊として組織化された。ルイ 14 世 (1638-1715) の時代に増員され、一連隊が 12 中隊より成り、一中隊は 120 名の兵から成った。兵士はいずれもスイス全土から徴集された。1763 年には 16 連隊に増員される。彼らはその忠誠心を国王から信頼され、フランス人親衛兵の 2 倍の手当を支給されていた。連隊は国王の身辺警固と国内治安の維持にあたり、ライン河、アルプス山脈、ピレネー山脈を越えて出兵することはなかった。制服は赤、折り返しは青の華麗なものであった。大革命の時に、この親衛隊に前述の百人隊が合流し、1792 年 8 月 10 日、暴徒がチュイルリ宮を襲った時、勇敢に抗戦して、国王一家を守護したことは有名である。彼らはチュイルリ宮を無事脱出した国王から発砲停止の命令を受けるまで、大砲も準備して来攻した暴徒を相手に奮戦し、600 名余の(一説では 700 名余)戦死者を出した、といわれる。王政復古期には更に 2 連隊が増設されるが、1791 年に廃止された。

13) la place de Carrousel : チュイルリ公園とルーヴル美術館の中間にある広場。この造成は 1602 年に着工されたが、本格的に工事が再開されたのは 1849 年から 1852 年にかけてであり、完成したのは 1908 年である。大革命時代は「友愛」又は「革命」広場と呼ばれ、1792 年 8 月から 1793 年 5 月までギロチンが据えられた。

現在のカルーゼル凱旋門から東約 5 米の所を、シャルル 5 世 (1337-1380) の建設したパリ市の城壁が幅 3.5 米の濠を前にして聳えており、北の方に行くとサン・トノレ城門

に至る。ここで、1429年9月8日、パリ攻撃の時、ジャンヌ・ダルクが腿に矢傷を負った。西の方角約200米の所にチュイルリ宮が聳え、現在のフロール館からマルサン館までのびていたのである。

この広場の名となった「カルーゼル」は、4騎1組づつになって演じられる騎馬パレードを意味したが、騎馬武者が柱に吊した環を槍で突き取るゲームなども行われた。この広場で、1662年6月5日と6日、皇太子誕生を祝って、ルイ14世が豪華なカルーゼルを中心とした祭典を挙行した事に由来する。チュイルリ宮を背景に、15,000人収容の半円形の大観客席が建設された。ローマ皇帝の衣装をつけたルイ14世が先頭に立って入場し、見事な馬術を披露して、観客の絶賛を博した。

14) 立法議会への避難：国王に対し、チュイルリ宮警備のフランス人部隊の多くが暴徒側に寝返り、貴族やスイス人親衛隊のみが、王宮防衛のため果敢に抵抗した。形勢不利とみて検事総長レドレル（1754-1835）が議会へ避難するように進言、ここで死ぬ、と主張したマリ・アントワネットをルイ16世が説得して宮殿を脱出し、庭園を横切って、現在のカスティグリヨヌ街に面した石段を登り、チュイルリ宮の調馬場のホール Salle de Ménage に設置されていた立法議会に逃げ込んだ。調馬場は現在のリヴォリ通りのピラミッド広場からカスティグリヨヌ街の一角を占めていた。避難して来た国王一家に対し、立法議会議長ヴェルニヨ（1753-1793）は、陛下をお守りします、と誓うが、チュイルリ宮を占領し、スイス人親衛隊を虐殺した暴徒たちが勝利をおさめた時、事態の急進展にたじろぎ、王権の停止と国王一家のタンブル塔への幽閉を承認してしまうのである。国王一家が脱出の時に歩いた道は、ファイヤン派の小道 passage des Feuillantes と呼ばれ、チュイルリ宮の庭園からサン・トノレ街に通じており、ファイヤン修道院とカプチン修道院の間を通っていた。調馬場のホールはチュイルリ庭園に並行して建っており、現在はリヴォリ通りが走っている。立法議会の議場となったこの建物は、リヴォリ通り230番地にあり、1720年に建築され、正式には「チュイルリ王立調馬場ホール」la Salle du Manège royal des Tuileries と呼ばれた。この議場でルイ16世の裁判が行われた（1793.1.15.-20.）。

15) Louis Capet：王権を停止されたルイ16世は、最早国王でなくなり、一般人と同じく姓をつけられたが、遙か昔の祖先の Capet が軽蔑の念と共につけられた。

16) tour de Temple：聖堂騎士団（Ⅲの注25参照）のパリ本部は、城壁と物見櫓を配した堅固な要塞で、現在のパリ市の第3区と第4区にまたがっているタンブル街を中心に

ひろがっていた。その中心に、日本の城でいえば天守閣にあたる donjon が聳えていた。この塔は、1222 年、ユベール兄弟によって建造され、その堅固さから、聖堂騎士団の重要書類と財宝の金庫として使用されていた。一辺 15 米の四角の部厚い切石の壁を持ったこの塔は、四隅に側塔がついている。5 階建てで、高さは約 50 米ほど。各階に大部屋一つと小部屋が三室設けられ、側塔の一つに螺旋階段があって、これを利用して登り降りした。後に増築され、スレート瓦の屋根がつけられ、ピラミッド風になった。

1792 年 8 月 13 日、国王夫妻と皇太子と皇女、それに国王の妹エリザベート夫人が、この塔に幽閉された。国王夫妻とエリザベート夫人は処刑される。皇太子ルイ・シャルルは、父ルイ 16 世が退位させられ処刑された (1793.1.15.) 後、王家の伝統として国王ルイ 17 世になるが (1793.1.21.)、これは当然ながら塔の内部でひそかに行われたものである。皇太子は、虐待と心痛の結果、1756 年 6 月 8 日午後 3 時頃、このタンブル塔で死亡した、とされている。僅か 10 歳 (1785.3.25.生れ) の悲運な生涯だった。6 月 10 日、遺体はフォーブール・サン・タントワヌのサント・マルグリット教会に埋葬された、といわれるが、1816 年に行われた調査で、それらしい証拠が発見されなかったため、死亡当時から流布されていた噂、皇太子は本当は生き延びているのではないか、という王党派からすれば果てしない願望に火をつけた。そのため、その後、我こそは皇太子と自称する人物が出現した。皇女マリ・テレーズ・シャルロットだけが幸運にも生き残って、このタンブル塔から出られた (XIV の注 7 参照)。

この後、タンブル塔は牢獄に転用され、多くの重要な国事犯が監禁された。異色の人物として、英国海軍提督ウィリアム・シドニー・スミスがいる。彼は 1796 年 4 月 20 日の戦闘で捕虜となり、この塔に収容されたが、1798 年 5 月 10 日にまんまと脱走に成功している。その他、(現在のハイチ、当時の) サント・ドミンゴ島の黒人奴隷の叛乱の指導者トゥーサン・ルーヴェルチュール (1743-1803)、反ナポレオン王党派のシャルル・ピシュグリ將軍 (1761-1804)、ヴァンデの乱の指導者ジョルジュ・ガドゥーダル (1771-1804)、彼らと気脈を通じたとして逮捕された反ナポレオン陣営の大立物ジャン・ヴィクトール・モロー將軍 (1763-1813) らがいる。ピシュグリは監禁された 3 週間後に (1804.4.6.)、ネクタイで首吊り自殺をし、カドゥーダルは 1804 年 4 月 6 日に処刑され、モローはアメリカに追放されている。

塔と附属の建物は改造され、1816 年にルイ 18 世によりある修道院に下賜されたが、1848 年に国民衛兵の兵舎に転用された後の 1853 年に取り壊され、タンブル小公園が設置

された。設計はアルファンで、1857年に完成している。

17) Jean-Baptiste Cant Hanet Cléry (1759–1809) : ルイ 16 世の従僕で、国王に対する忠誠心で有名。セーヌ-エ-オワーズ県マルヌ村ジャルディに生れ、ウィーンで死んだ。タンブル塔内で国王に仕え、王の遺言により莫大な恩賞を授与された。ロベスピエール失脚後に釈放され、ドイツで国王一家の生存者に合流した。1798年にロンドンで出版された『ルイ 16 世幽閉中にタンブル塔で過した日記』*Journal de ce qui s'est passé à la tour du Temple pendant la captivité de Louis XVI* で、彼は感動的な素朴さで、悲劇の日々を記している。この『日記』は当時の人々に熱狂的に迎えられ、多くの版を重ねた。

18) 1789年8月26日、立憲議会によって採択された『人間と市民の権利の宣言』略して『人権宣言』*Déclaration des droits de l'homme et du citoyen* は、前文と17条から成り、人民の自由、平等の権利を高らかに謳っている。封建的旧制度は否定され、当然ながらその社会を統治していた王政の廃止を明記したものだ。新生フランスが国王ルイ 16 世に突き付けた最後通牒である。少しばかり嫌がらせの観もある。

19) 8月10日は、1792年8月10日、チュイルリ宮をパリ市民が攻撃し、国王親衛隊のスイス人部隊を撃破、宮殿に乱入し、ルイ 16 世が国民を裏切っていた事実を示す多数の秘密書類を押収した騒乱の記念日である。国王の背信が国民の激怒を誘発し、王権停止、国王一家のタンブル塔幽閉、やがては王政廃止へ至る第一歩となった。大革命のなかの重要な記念日を、熱狂的な革命信奉者が、息子に命名したのであろう。

20) 実月は共和暦第12月で、現在の8月18(19)日から9月16(17)日までを指す。この間にプロシャ軍の進攻、これに対するフランス人民軍の反攻、狂信的な革命分子による王党派囚人の大量虐殺事件、国民公会の成立など激動の月だった。

21) 「マラー-クートン-ピク」のマラーは Jean-Paul Marat (1743–1793) で、ジャコバン派の指導者で大革命を推進したジャーナリストだが、ジロンド派の女性シャルロット・コルディにより、7月13日に暗殺された。クートンとは Georges Couthon (1755–1794) で、クレルモン-フェラン出身の弁護士、1791年に立憲議会議員でジャコバン派のオピニオン・リーダーになる。国民公会議員として公安委員会のメンバーとなり、ジロンド派を始めとして反革命派を弾圧した。しかしロベスピエール派として彼の処刑と同日に処刑された(7月28日)。体が麻痺しても担架で議場に運ばれた精励振りがパリ市民を感動させ、熱烈なファンが多かった。Pique は槍で、当時の人民の主要な武器の一つ。革命烈士ともいうべき二人の名に槍をつけたのは、気分的になんともなくわかる気がします

が、どうでしょう。

22) テキストでは単に la porte Antoine となっているが、正しくは la porte Saint-Antoine である。現在の第4区のサン・タントワヌ街はバスチュー広場とセヴィニェ街を結ぶ幅6米、長さ80米の通りで、ローマ人の造成したパリとムランを結ぶ街道である。サン・タントワヌ門は、現在の101番地にあるシャルルマーニュ高校の入口辺にあった。フィリップ・オーギュストの建造した城壁の城門の一つで、1190年に設置された。この門は1382年に新築され、第2の城門が誕生した。1540年6月1日、スペインでの叛乱を鎮圧するためフランス国内の通行を許可されたシャルル・カンが美しい行列と共にパリに入城している。バスチュー要塞は800発の祝砲を放ち、敬意を表している。1660年8月26日にルイ14世と若い王妃マリ・テレーズが、この城門からパリに入城している。

23) M^{me} comtesse de Genlis, Stéphanie-Félicité Ducrest de Saint-Aubin (1746—1830)：貴族の家に生れ、16歳でジャンリス伯 Bruslart Genlis と結婚。教育学に専念し、ルイ・フィリップの幼少時代の家庭教師を務めた。大革命時代に一時亡命したが1802年に帰国後はナポレオンに好遇され、王政復古になってもオルレアン家から年金を支給された。教育学関係では『城館の夜ばなし』*Les Veillées du Chateau* (1784) が代表作だが、その他18世紀の感傷的な小説の伝統を受け継いだ『少年亡命者』*Les Petits Emigrés* (1798)、『クレルモン嬢』*M^{lle} de Clermont* (1802) などがある。

24) Louis Philippe Joseph, duc d'Orléans, dit Philippe Egalité (1747—1793)：1752年までモンパンシュ公爵、ついで1785年までシャルトル公爵を名乗り、父の死(1785)からオルレアン公爵となった。ルイ14世とモンテスパン夫人の曾孫になるアデライード・ド・ブルボン・バンティエーヴルと結婚し、莫大な持参金のお蔭で彼はフランス最大の金持ちになった。極めて貞淑な妻をなおざりにして、彼はこの富を自己の政治的野心の実現のために濫費する。英国かぶれの彼は時代の新思想すべてに迎合し、自由主義的貴族のリーダーとなった。マリ・アントワネットに言い寄って肘鉄を喰った事が原因らしく、彼は王妃に対して烈しい私怨を抱いている。例の首飾り事件は彼にこの憎悪を公憤の形で発散する絶好の機会を与えた。これ以後、彼は公然と反王党派の領袖となり、自邸のパレ・ロワイヤルの庭園をパリ市民に解放し、更に邸宅を集会場として使用させて人気を得た。1787年の名士会では政府の経済政策に対して最も激しい反対をし、三部会のみが税金新設の承認権があると主張した。1789年には三部会の貴族部会の議員に選出され、第三身分の部会と連携した革新的貴族たちを指導した。この頃から彼のパレ・ロワイヤルの邸宅は革命

分子の集合地となった。彼もルイ 16 世に代って即位するか、少なくとも攝政たらんとする幻想を抱いたらしい。ルイ 16 世のヴァレンヌへの逃亡は、彼のこの野望達成に有利になったかの観があった。しかし時勢は急転回し、革命の進展が王政そのものを否定してしまう。パリ選出の国民公会議員となった彼は貴族の称号廃止の決議を受けオルレアン公爵の称号を捨て、Philippe Egalité (平等公フィリップ) と称するようになる (1792.9.14.)。国民公会がルイ 16 世の死罪の可否を問う投票の時 (1793.1.18.)、国王の従兄にあたる彼は死刑賛成にためらうことなく一票を投じたのである。しかしヴァルミーの勝利を得た救国の英雄たるデュームーリエ將軍 (1739—1823) が王権回復の陰謀の主謀者として国民公会から逮捕令が出たのを知り、オーストリー軍に投じる変事が起きた。デュームーリエ將軍と共にフィリップ・エガリテの息子ルイ・フィリップもオーストリーに逃亡したのである。この息子こそ後の 7 月王政の国王となる人物である。国民公会はこのような事態からフィリップ・エガリテにも反革命分子の嫌疑をかけた。1793 年 4 月に逮捕された彼は、旧制度の大貴族にふさわしい賤民たちを軽蔑する尊大な勇気を示しつつ処刑された。1793 年 11 月 6 日のことである。

25) Jean Baptiste du Val-de-Grâce, baron de Cloots, 通称 Anacarchis Cloots (1755—1794) : プロイセンのグレーヴェに生れ、莫大な財産を相続した。フランスで教育を受け、アナカルシスの名で欧州各地を旅し、1776 年にパリ定住した。大革命が勃発すると熱狂的なジャコバン派として、古代ギリシャ的民主主義を手本にして、民衆と国家を改革しようと奔走した。国民議会議員として各国の貧困者大衆の代表の名の下に人権について演説し、「人類の雄弁家」Orateur du genre humain と呼ばれた。立法議会ではハンガリー、バイエルンへの宣戦を説き (1792)、国民公会へはオワーズ県選出の議員として登場、エベールと共に反宗教と徹底抗戦を主張し、パリの貧困市民層の支持を得た。理性崇拜運動組織によりロベスピエールと対立、公安委員会の告発によりエベール派として処刑された (1794.3.24.)。

26) Donatien Alphonse François, marquis de Sade (1740—1814) : 父は外交官で母方の血筋からブルボン家につながる。幼少の時、父方の伯父ジャック・ド・サド神父に托され、この伯父に初等教育を受けた。15 歳の時に入隊して 7 年戦争には騎兵大尉として参戦した。1763 年にモンリュユ終身税裁判所長の娘と結婚、二男一女を得るが、程なく家庭を捨て放蕩生活に耽溺する。結婚の僅か数か月後に放蕩と瀆聖の罪でヴァンセンヌの天守閣に投獄される。しかし微罪であった上に初犯という点が酌量され 2 週間後に釈放さ

れた。これで改悛するどころか、サドの放蕩はより烈しくなり、特に女性問題で多くの醜聞を流した。1768年には相手の女性を虐待した罪で罰金支払いを命じられた上に投獄されてしまう。釈放後の1772年、マルセイユで刺激剤のカンタリジン入りの一種の毒菓菓子を使用した件で有罪となったため、ジュネーヴに逃亡しなければならなくなった。エクス的高等法院は欠席裁判で彼に死刑の判決を下したのである。シャンベリーで逮捕された彼は、義母の裁判所長夫人の要請でフランスに引渡され、ミオラン要塞に収監されるが(1772-73)、まんまと脱走してしまう。しかし1777年2月、パリ潜伏中に逮捕されヴァンセンヌの天守閣に監禁された。毒菓菓子での毒殺が立証されなかったため、欠席裁判の死刑判決は取消されるが、義母が入手した封印状の効力により、サドは、ヴァンセンヌ(1778-84)、パスチーユ(1784-89)と牢獄を盪回しにされる。大革命のお蔭で1790年4月に釈放され、パリのピック地区の書記に任命される。恐怖政治の時に穏和主義者として逮捕され投獄されるが、ロベスピエールの失脚により処刑を免れた。執政官政府時代(1795-1799)には彼の作品は公刊を許可されたが、統領政府時代(1799-1804)になると、特にナポレオンの意向からか、サドはポルノ文学の作者として断罪され、サント・ペラジ刑務所に収監され、やがてピセートル刑務所に移され、1803年にシャラントン・サン・モーリスの精神病院に収容され、ここで歿した。愛人と同棲する許可を得、院内で芝居を上演するなどして、晩年は快適な日々を送ったらしい。長い間、猥褻文学として卑しめられていたサドの作品は、人間の本能の性本能についての鋭い省察の書として現代では評価されている。

27) *Justine ou les Malheurs de la Vertu* (1791)：『ジュスチーナあるいは美徳の不幸』は、サドがパスチーユ監獄に収容されている時に執筆された。彼は彼女を主人公にしたジュスチーナ物を3回書いているが、これが最初のものである。この獄中で執筆された作品は短篇『美徳の不運』と『美徳の不幸』で、釈放後に大幅な加筆をした長編『新ジュスチーナ』全4巻がある。この作品が当局に睨まれ、ポルノ作家として告発されたのである。貞淑で美徳を愛するが故に多くの災厄に襲われ世の辛酸を嘗める純情可憐な妹娘ジュスチーナと、悪徳に身を捧げ、現世の栄耀栄華を満喫する姉娘ジュリエットの対照的な人生を描いた一種の教養小説で、発売当時はベスト・セラーになった。これは勧善懲悪の18世紀的モラルを完全に否定した思想小説ともいえる作品であった。

28) カルメル会修道院 Couvent des Carmes：パリ市第6区ヴォージュラール街70番地にあり、正式には「跣足カルメル会」Carmes déchaussésの僧院でサン・ジョゼフ教会

を付属教会として持っている。この会の修道士たちは靴を履かず素足に草鞋ばきだったため *déchaussé* と呼ばれた。

この修道会は、1156年頃、パレスチナのカルメル山上に南西イタリアのカラブリア出身の十字軍兵士により創設されたという。やがて托鉢修道会として公認され、1288年頃に西欧に移住した。16世紀にアヴィラの聖女テレーズと十字架の聖ヨハネらの刷新運動の結果、跣足カルメル会が誕生、オランダ、フランス、イタリア、スペイン各地に急速に発展した。

パリではイタリアから来たカルメル会修道士たちが、1611年5月22日、パリ定住を認可された。カセット街の仮住いの間に、彼らは修道院を建設するためこの土地を購入し、1613年2月7日から工事を開始し、1616年に完成させている。付属教会は同年の7月20日に工事を開始したが、最初の礎石は王妃マリ・ド・メディシスが据えつけた。教会は1620年に完成、1625年12月21日、シャルトル司教により聖ジョゼフに奉獻された。

修道院は広大な菓草園を持ち「カルメル水」として有名な気付薬のハッカ香水のメリッサ水を専賣していた。またルガール街とカセット街に沿って数軒の立派な邸宅を建築して賃貸し利益を得ていた。

しかし大革命はこの繁栄に止めを刺した。革命政府により、修道会は所有していた多数の金や銀の食器や12,000冊の蔵書を没収され、1792年8月11日には、付属教会が刑務所に改造されてしまう。アルル大司教、ボーヴェとサントの両司教を含め160名の聖職者が収容された。彼らは、1792年9月2日、3日、4日と続いた革命派による襲撃によって虐殺されてしまうのである。修道士たちは、教区の国民軍兵士により屋根裏部屋に匿われて、虐殺から逃れることができた。

その後間もなく修道院自体が刑務所になり、700名以上の囚人が収容されたが、その中にはエギョン公夫人、アレクサンドル・ド・ボーアルネ将軍と彼の妻で後にナポレオンと再婚して皇帝の妃となるジョゼフィーヌ、オッシュ将軍らがいた。大革命後は一時ダンスホール「マロニエ」となったが、1797年8月15日、カルメル会の修道女ソワエクールが土地の一部を買い戻し、修道会再建に乗りだした。1845年パリ大司教区がこの土地と建物を購入し、教会関係の学校を創立、これが1875年「カトリック学院」L'Institut catholique となり今日に至っている。

(續　く)

(追 記)

(1) 参考図書などは, [I] の巻末に掲載してありますので, そちらを御参照下さい。

(2) 前項 [XIV] に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p. 9. 上から 5 行目 反対勢力

p.12. 上から 10 行目 遺贈

p.13. 下から 9 行目 隅

p.14. 上から 3 行目 隅

p.20. 下から 8 行目 この通りは

p.21. 下から 13 行目 欺き

p.22. 下から 13 行目 捕虜となり、

— 2006.1.21. —